

知識探訪

多民族社会の横顔を読む 協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

ボルネオ内陸先住民族の移動性 ~ 分水嶺を越えて

祖田亮次 (大阪市立大学准教授)

2012 年の夏、民族の移動や混交状況に関心を持つ研究者仲間数人と、サラワク州の森の中を歩く機会を得た。ある水系と別の水系を隔てる分水嶺(れい)を、歩いて越えてみようという企画だった。日本の地形をイメージしてしまうと、分水嶺を越えるというのは危険な行程のように思われるかもしれないが、ボルネオの地形は起伏が緩やかで、標高と勾(こう)配だけを考えれば、分水嶺を越える移動はそれほど大変なことではない。

私たちが歩いたのは、かつて地元の先住民が狩猟・交易・移住などによく利用していた 10 キロメートルほどの徒歩移動ルートで、案内役として同行してくれた地元先住民によると、頻りに人が通って適切に道が維持されていれば、ほんの 3 時間程度で越えられるという。実際には、このルートは過去 10 年間ほとんど使われていなかったため下草が繁茂しており、藪(やぶ)こぎで予想以上の時間を費やしたが、それでも、ジャングル・トレッキングに戦々恐々としていた私たちにとっては、やや拍子抜けの山行となった。「なんだ、こんなに簡単に越えられるのか!？」と。

しかし、この拍子抜けの感覚を持てたことは、ある意味、成功であった。というのも、サラワクの人々が、分水嶺を越えて広範囲に移動してきた歴史はよく耳にするものの、それがどれほどの労苦なのか想像がつかなかったのが、意外なほどに容易に越えられることを体験して、彼らが頻りに水系を越えて移動してきた歴史を、リアリティーを持って感じられるようになったからである。

サラワクの内陸部の諸民族は、移動性が非常に高いと言われる。彼らは、歴史的にさまざまな移動を繰り返してきた。その移動の目的・距離・頻度・期間などは、各民族集団の生業や文化とも関係しており、一様ではない。しかし、河川が重要な移動ルートであり続けたことは事実である。そして、異なる水系への移動の場合には分水嶺を徒歩で越えるという形態をとってきた。内陸先住民の村で過去数世代～十数世代の移住史を聞くと、詳細なルートまでは分からない場合でも、先祖たちの移動履歴を伝える口頭伝承には、たいてい、「sungai(河川)」の名前と「bukit(山/丘陵)」の名前がセットで表れてくる。つまり、彼らは古くから、河川伝いの舟運と徒歩での尾根越えを組み合わせで移動してきたのであろう。

このような、分水嶺をまたいで異なる水系をつなぐ徒歩ルートは、サラワクの内陸部の各地に存在している。さらに、インドネシア領においても、同様の話が聞かれる。たとえば、カリマンタンのアボ・カヤン地域で古老たちに話を聞くと、1950 年代から尾根(国境)を越えてサラワクに出稼ぎに行っていた話や、60～80 年代にかけてサラワク領内に複数の分村を形成したことなどが語られる。彼らは、カリマンタン側の河川をさかのぼって小舟を乗り捨てたあと、1 日かけて徒歩で尾根を越え、サラワク側に入ると新たに小舟を造って川を下り、700 キロメートル以上の船旅の末、沿岸の諸都市へ移動していったという(もちろん逆の行程もしかり)。古老たちの昔話を聞いているだけでも、その移動のダイナミズムを感じることができる。こうした話を聞くと、分水嶺を越える徒歩移動は汎ボルネオ的なものと考えてよさそうである。

ボルネオの内陸先住民の多くは大小の河川沿いに集落を建設し、本流・支流を小舟で移動しつつ、言語や文化の異なる他集団とさまざまな社会的関係を築いてきた。このような水系を単位として形成された社会は「流域社会」と呼ばれる。ボルネオの社会を理解するには、この流域社会という単位が重要であるとされる。しかし、尾根ひとつ越えて別の水系に入れば、その移動距離と社会的ネットワークの範囲は一気に拡大する。こうした移動は、隣接する流域社会を結びつけ、流域「間」コネクションとでもいうべきものを構築してきた。ボルネオの社会形成史や民族間関係を議論するには、こうした移動のダイナミズムとネットワーク形成の多様性・重層性を知る必要があるように思われる。

< 筆者紹介 >

1970 年、京都府生まれ。京都大学大学院文学研究科指導認定対学。博士(文学)。広島大学助手、北海道大学助教授などを経て現職。専門は地理学・東南アジア地域研究。1990 年代半ばから、サラワク先住民の移動研究を行ってきたが、最近では、河川流域学や災害文化論などにも関心を持つ。著書に『People on the move: rural-urban interactions in Sarawak』(2007 年、Kyoto University Press and Trans Pacific Press) など。